

同三十六年(一九〇三)十一月二十七日依頼免本官并兼官。

この間明治十九年には神田裏猿楽町の尚綱小学校内で「唱歌會」を設立し、鳥居悦、上眞行、辻則承らとともに民間の音楽学校を始め、二十年設立の芝唱歌會(小山作之助主宰)と併立していた。奥好義は唱歌作曲者として又芸術的演奏家として当時の傑出した若い秀才であった。

明治三十六年(一九〇三)から七年間山形県立酒田高等女学校で教鞭をとった。この間に山形県内の数校の校歌を作曲している。

酒田から帰京後は再び楽部にもどり、伶人としての職務の他、唱歌の作曲および音楽教育に従事した。

昭和八年(一九三三)三月九日没。

初期の唱歌作品『東亞音楽論叢』二一九〜二二〇頁)

祝日大祭日歌 天長節、黒川眞頼作詞、二十五年頃。『明治唱歌』(奥、大和田共編)——第一集より「紀元節」下田歌子作詞、〈勸學の歌〉高崎正風作詞、〈新年〉〈春風〉〈千里の友〉〈沖と磯〉以上大和田作詞、二十一年。第二集より「浦の夏」〈岩間の清水〉〈舟あそび〉〈夜半の曲〉以上大和田作詞、二十二年。第三集より「霞む夕日」〈皆物眼〉以上大和田作詞、〈海のあるる〉〈かたみの琴〉〈あられ〉以上「いさり火」より、二十二年。第四集より「未來の旅」〈墳墓の土地〉〈招ける春を〉以上大和田作詞、二十三年。第五集より「去年の友」〈故郷の文〉〈農夫の吟〉以上大和田作詞、二十三年。第六集より「汽車」〈ただ望〉〈星かと思えて〉〈あすの空〉以上大和田作詞、二十五年。『唱歌萃錦』(奥好義選)——第一集より「國の基」高崎正風作詞、〈御垣の内〉同(学習院生徒奉祝立皇太子式の歌)、〈教への庭〉下田歌子作詞、〈別れの歌〉加部殿夫作詞、〈流るる水〉下田歌子作詞、二十二年。第二集より「御代の秋」税所敦子作詞、二十三年。『儀式唱歌』(奥編)二十六年——「開校式」〈終業式〉以上本居豊頼作詞。『新編中學唱歌』(奥編)二十五年——「五月二十八日」阪正臣作詞、〈かざしの櫻〉下田歌子作詞、〈暮秋 税所敦子作詞、〈いざ進め〉中村秋香作詞。『歴史唱歌』(奥編)二十七年——「神の御告」〈巨勢山〉以上阪正臣作詞、〈關の白雪〉〈磯邊の波〉鳥山啓作詞、〈ゆかりの色〉菊間義清作詞。御製〈金剛石〉二

十六年。『新編軍歌集』(奥編)二十七年。小學唱歌(奥編)二十七年。軍國軍歌(喇叭の響)二十七年。〈金糸雀(かなりや)〉菊間義清作歌、二十七年。〈御垣の梅ヶ枝 御結婚滿二十五年御祝儀唱歌、二十七年。〈婦人從軍歌〉菊間義清作詞、二十七年七月。〈旭の御旗〉四竈納治作詞、二十七年。〈平壤の戦〉中村秋香作詞、大捷軍歌』第一より、二十七年。〈勇敢なる水兵〉佐々木信綱作詞、二十八年二月。〈皇統〉小中村義象作詞、『明治軍歌集』より、二十七年十一月。〈道の先〉『音楽雜誌』二十七年六月。〈町田大尉〉阪正臣作詞、大捷軍歌、二十七年。〈出陣の曲〉〈進軍の曲〉〈凱陣の曲〉以上大和田作詞、新編軍歌より。幼稚の曲(大和田・奥共編)二十一、二年——「朝の歌」〈曇らぬ日〉〈來鳴や鶯〉〈鴨ぞなく〉〈日は山に〉〈日本の名〉。〈鳥〉田邊友三郎作詞、『幼年唱歌』二編下より、三十四年。〈家の風〉佐々木信綱作詞、『國教唱歌集』より、三十年。

なお、奥はわが国で最初のピアノ教則本を編集したことでよく知られている。『洋琴教則本』寛裕舎、明治二十三年九月発行、はバイエルを軸に小学唱歌の編曲を挿入したもので、楽部では大正時代までこの教則本を使用していたそうである。

辻則承(つじのりつぐ) 東京府士族、旧樂人

安政三年(一八五六)四月一日大和國添上郡奈良御所馬場に於て生る。

明治三年(一八七〇年)十一月伶員申し付けられる。

同六年(一八七三)七月依頼東上。

同七年(一八七四)六月二十八日上等伶員申し付けられる。七月十七日任

少伶人。十二月十四日歐洲樂傳習申し付けられる。

同八年(一八七五)四月八日任權中伶人。

同十年(一八七七)十一月一日一等伶員申し付けられる。

同十一年(一八七八)三月十四日神武天皇御例祭御陵へ参向申し付けられる。

八月二十九日任五等伶人(改正のため)。

同十二年(一八七九)五月二十二日洋琴傳習申し付けられる。

同十四年（一八八一）二月十日文部省御用掛兼勤、音楽取調掛兼務申し付けられる。オーケストラ、内外音律の研究、和声の研究、唱歌の選曲に従事。唱歌、オルガン、ピアノの授業を担当。

同十七年（一八八四）十一月十四日任雅楽手。

同二十一年（一八八八）五月十九日任樂師兼伶人。

同二十四年（一八九一）四月東京音楽學校授業囑託解任される。

以後雅楽の研究および演奏者として活躍。

大正十一年（一九二二）八月二十九日没。

辻則承には次のような唱歌作品がある。いずれも雅楽調を主として作曲している（『東亞音楽論叢』一二二頁）。

〈別れの歌〉加部巖夫作詞、〈故郷の山〉大和田建樹作詞、この二曲は『明治唱歌』第一集（二十一年）に掲載。〈隔てぬ影〉大和田建樹作詞、『明治唱歌』第二集（二十二年）。〈少女の死〉「いさり火」より、『明治唱歌』第三集（二十二年）。〈秋はいま〉大和田建樹作詞、『明治唱歌』第四集（二十二年）。〈雪ふまん〉大和田建樹作詞、『明治唱歌』第五集（二十三年）。〈四恩の歌〉加部巖夫作詞、『音楽雑誌』第十六号、明治二十五年一月。

多久隨（おおの ひさより） 東京府士族

嘉永三年（一八五〇）七月二十六日生。

慶應四年（一八六八）正月三日内侍所勤番仰せ付けられる。同月二十八日太政官代勤番仰せ付けられる。

明治二年（一八六九）二月十七日太政官代勤番被免。

同三年（一八七〇）六月十五日御用に付東上申し付けられる。十一月二十日伶生申し付けられる。同月二十九日伶生被廢。同日任少伶人。十二月十日東京府貴属士族仰せ付けられる。

同四年（一八七一）正月二十日春日祭に付上京申し付けられる。六月六日叙従九位。

同七年（一八七四）十二月十四日歐洲樂傳習申し付けられる。

同八年（一八七五）四月八日任權中伶人。

同九年（一八七六）十一月二日除服出仕。

同十年（一八七七）十月三十一日式寮中大伶人以下被廢。十一月一日任四等伶人。

同十一年（一八七八）七月二日佛國博覽會出品樂器整理方一層勉勵に付金圓下賜。八月二十九日一等伶人以下被廢更に一等伶人以下被置。同日任四等伶人。

同十三年（一八八〇）十一月十一日光格天皇御式年祭参向申し付けられる。

同十六年（一八八三）三月二日文部省御用掛兼勤申し付けられる。取扱准判任。同日音楽取調掛申付爲手當一ヶ月金拾圓給與。三月三日助教可相勤。

同二十年（一八八七）二月音楽取調掛を辭職のちは二十一年から二十九年（一八八八〜一八九六）まで東京盲学校を兼任し、同校でヴァイオリンおよび唱歌を教えた。大正十年（一九二一）十二月樂部を依願退職、十三年（一九二四）八月十九日没。

多忠廉（おおの ただきよ） 東京府士族、旧樂人（従五位下右近衛将曹多忠廉）

弘化二年（一八四五）十一月十六日生。

慶應四年（一八六八）正月三日内侍所非常勤番申し付けられる。二月二十八日内侍所非常勤番被免太政官代勤番申し付けられる。

明治元年（一八六八）九月十七日叙従五位上。

同二年（一八六九）七月二十七日百官受領被廢に付各位階を称する、但上下の称自四位初位に至迄被廢。

同三年（一八七〇）三月十五日御用に付東上仰せ付けられる。十一月十九日自今旧官人元諸大夫侍并元中大夫等位階総て。十一月二十九日任少伶人。

同七年（一八七四）十二月十四日歐洲樂傳習申し付けられる。